通販生活の読者のみなさんから4700万円、全国からの分と合わせると7億6000万円ものカンパが集まりました。ペシャワール会は1986年から活動していますが、これは記録的な金額です。本当にありがとうございました。

昨年、カブール市民の1割（約15万人）は生きて冬を越せないだろうといわれて、食糧の緊急支援カンパを呼びかけました。すぐに多くの方々からカンパが寄せられたので、4500トンの食糧（小麦粉と食用油）配給を計画しました。ところが1400トン（約10万人分）の配給を終えたところでカブールが陥落、東部の干ばつ地帯でもタリバン政権から北部同盟に変わると治安が悪くなり、配給を停止しなければなりませんでした。

実際に現地で活動していて感じるのですが、日本で報道されているように、タリバン政権が敗れて事態がよくなったということはありません。むしろ、悪くなりました。タリバン時代は賄賂が厳しく禁止されていました。活動をサポートしてくれたお礼として、軍に食糧の入った袋を1つか2つ手渡すとたいへん感謝してくれたものです。ところが進駐してきた北部同盟の軍隊は統率がとれておらず、トラックごと食糧を取られそうになったり、倉庫を襲撃されそうになったり、「活動の手伝い費用として何百トンかよこせ」と請求されたりしました。

配給を止めたかわりに、私どもの

干ばつに見舞われた村で、井戸やカレーズ（地下用水路）の確保作業を行なう。

「アフガニスタンの子どもたちと親たちに食糧を」募金報告

1万6472人の読者から4710万1344円ものカンパが寄せられました。（2002年4月30日現在）

おかげさまで2万7339家族（約27万人）に食糧を届けられました

本誌春号でカンパを呼びかけた「ペシャワール会〈いのちの基金〉」に、たくさんの読者からご賛同いただきました。
寄せられたカンパはどのように活用されているのでしょうか。
そして、アフガニスタンの現状はどうなっているのでしょうか。
「ペシャワール会」代表で医師の中村哲先生にお話をうかがいました。

診療所に栄養パックを1万パック用意して、栄養失調の子どもを持つ母親に配っています。これまで、食糧支援に4500万円を使いました。

いま、カブールには国連や世界中の援助団体がたくさん入っていて、軒を連ねて看板を出しています。おかげで、1年前はひと月250ドルだった家賃がいまは3000ドルと高騰しています。100以上の各国の援助団体が入っているのだから、私たちまでカブールで活動しなくてもいいだろうと、実は3月31日にカブールにある5つの診療所はすべて閉鎖する予定でした。ところが、オフィスはあるけれどまだ実動していないNGOが多く、「閉鎖しないでくれ」という住民の声もあって、5つから3つの診療所に減らしてつづけています。カブールは縮小して、どこからも支援を受けられず困っている人がたくさん暮している東部の農村地帯に活動拠点を移しています。

お寄せいただいたカンパの残金は、今後、以下の支援に使わせていただきます。

まず、緑化、農業支援につながる水源の確保です。現在、作業中の井戸は808ヵ所、そのうちまだ水が出ていない井戸は50ヵ所です。幸い今年は春雨が多かったので地下水の水位が上がっています。

この井戸掘りで働いている人は約700人、日本人のリーダーのほかは現地の農民です。井戸は誰にでも掘れるものなのですが、アフガニスタンは干ばつがひどく深く掘らないと水が出ない上に、深くなると巨石だらけの地層なので、その処理を日本の技術者が手伝っています。

最終的には2000ヵ所の井戸をつくりたいと思っています。808ヵ所は2年間でできましたが、残りの1000ヵ所余りは4～5年はかかるでしょう。なぜなら、私たちは労働の対価として現地の作業員に経済状態にあった日当を配っていますが、国連のプロジェクトだと一般的な現地の賃金より高い。みんな生活に困っているので、そっちに作業員が流れて行ってしまうのです。

私たちは現地の人たちを依存体質にしないように気をつけています。彼らは長年、自給自足の生活をしてきましたから、よそ者がいなくても食べて行けるという誇りを持っています。食べられなくなったのは、干ばつや空爆で土地が痩せ衰えてしまったからです。

農業は地域性が強く、日本のやり方がアフガニスタンに通じないことがあります。何千年もかけて根づいたやり方が地元にはあるからです。私たちの支援は、水を豊富に出し、緑化をすすめ、生産量をあげるアドバイスだけ。隣の農家が見て真似ができる、そんな農業支援を目指しています。

またカブールでは、戦争や誤爆で夫を亡くした貧民層の女性のために裁縫のワークショップをしています。いま、身よりのない女性たちは乞食をしています。放っておくと、アフガンには多国籍軍が4000人ほど入っていますから、すぐに売春がはじまるでしょう。ミシンの使い方を教えて、衣類、カーペット、寝具などをつくり、アフガン国内で販売して収入を得てもらう計画です。現在、17人の女性が訓練中です。

医療支援はカブールの3診療所、東部の3診療所、ペシャワール基地病院で、現地の医師とともに引きつづき医療活動をつづけます。

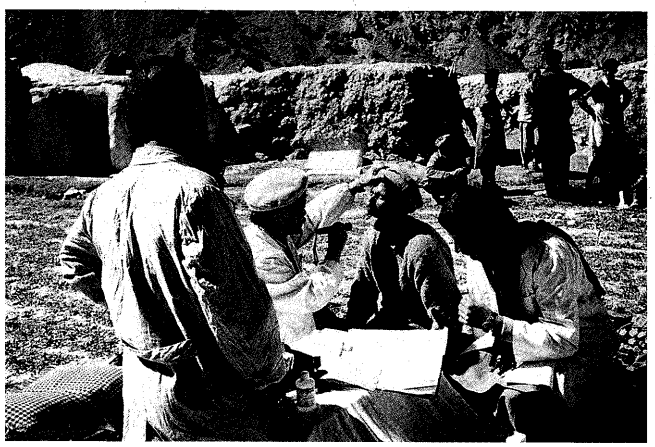
以上の支援を計画、実行中ですが、およせいただいた多額のカンパは数年先を見越して計画的に使いたいと思います。私たちの活動は地域の決定権をにぎる長老会と連携していますから、困っている人に確実に支援を届けることができます。

アフガン支援は長期にわたります。これからアフガン報道はどんどん薄れて行き、状態はますます悪くなるでしょう。これは確実です。難民が増えた分、去年より今年は数倍悪くなっています。読者のみなさんが「ペシャワール会」の会員になって、アフガンを長く支えてくださるとうれしいです。会費で現地診療所の運営を支えてほしいのです。

●

「ペシャワール会」入会のお知らせ

年会費3000円。振込用紙の通信欄に「入会金」と書いてご送金ください。郵便振替：01790-7-6559／加入者名：ペシャワール会



（上）山岳部で診察中の中村哲先生。86年、アフガン難民のための医療チームを設立、山岳地帯の無医村で診療を実践している。
（下）カブールで、身よりのない女性たちを対象に、裁縫のワークショップを開催。

編集部から

ペシャワール会の活動とアフガニスタンの現状をより知るための一冊。

中村哲著
『ダラエ・ヌールへの道』

石風社刊、2000円＋税

88年から現在までの現地活動を伝えるもので、『ペシャワールにて』（石風社）の続編。「印象的な出来事や感想を拾い上げて率直に述べた」と著者。アフガンで闘う日本人医師の渾身のメッセージ。

現地の変化にともない、「ペシャワール会」の活動も刻一刻と変化しています。最新の情報は「ペシャワール会」のホームページをご覧ください。http://www1m.mesh.ne.jp/~peshawar/